

# 中年期における夫婦の伴侶性形成に関する研究 (第2報)

赤 星 礼 子

## A Study of Companionship in Middle-aged Couple (II)

Reiko AKAHOSHI

### はじめに

本研究は、第1報<sup>1)</sup>に続き「中年期における夫婦の伴侶性形成」に関して有意義な示唆を得ることを目的としている。第1報では、中年期を40~50歳代として、20~30歳代の若年期と60歳以上の高年期の間に位置付けて、夫婦の伴侶性形成の実態を明らかにするようにした。その結果、(1)中年期は夫婦関係にとって“危機的”な時期にある、(2)より女性に“不幸”感がみられる、(3)伴侶性は情緒面だけでなく、行動面の一致も重要である、という3点を指摘できた。

そこで、本稿では、中年期を対象に研究を深めることにした。さらに、行動面での伴侶性形成に焦点をあて、より夫婦が共に行動する機会を増やすための要因を探ることにする。

なお、本研究をはじめめるにあたっては、中年期を高齢期の前段階と捉え、高齢期を豊かに過ごすためには夫婦関係の充実と、親族を越えた人のネットワーク作りが望まれると取り押さえた<sup>2)</sup>。その方策としては、性別役割分業観の払拭と女性の社会参加の促進を提言したい。具体的なレベルで言えば、夫の家事参加であり、妻の社会活動への参加である。

つまり、本稿の目的は、伴侶性形成の促進要因として、妻の家庭外での社会活動（収入を伴わない）と、夫の家事参加をあげ、(1)妻の家庭外での社会活動は、夫婦の伴侶性形成に役立つ、(2)夫の

家事参加が増えることは、夫婦の伴侶性形成に役立つ、という作業仮説を立証することにある。

### 1. 研究方法

今回は、より中年期に絞り40歳以上の女性を調査対象とした。調査は、佐賀県地域婦人会を通して県下全域で、配票法により、1995年5月に実施した。回収票は888であるが、分析対象となるのは、40~69歳層の有配偶者714である。

調査項目は、(1)夫婦の情緒面の伴侶性をみるために、①夫の妻の趣味・社会活動への理解、②夫の妻の人生観・価値観への理解、(2)夫婦の行動面での伴侶性をみるために、①夫婦一緒の外出（旅行や鑑賞、買い物）の程度、を設定した。また、②夫婦一緒に外出したいか否かを尋ね、中年期の女性の伴侶性形成への期待を明らかにする。

分析は、まず、前述のように中年期の年齢層を40歳から69歳までに拡大して行なう。第1報では、60歳以上は高年期としたが、高年期は70歳以上とする方がより適切だと考えたからである。そこで、今回、年齢要因をみる場合には、5歳刻みにした。分析の枠組みは図1に示す通りである。

### 2. 調査結果

#### (1) 分析対象者の属性

分析対象者の諸属性は、表1に示す通りである。世帯構成は、年齢階層により有意な違いがみら

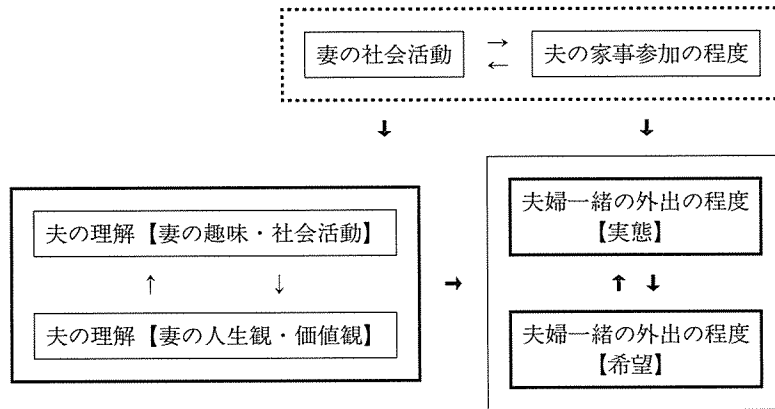


図1 分析の枠組み

れる。「親＋夫婦＋子」と「親＋夫婦」のように、親世代との同居世帯は、若い40歳代前半で7割を占め、徐々に減少して50歳代前半で4割、60歳代後半には1.4%となる。一方、自らが親世代となる「夫婦＋既婚子」の世帯は、年齢階層の上昇とともに増え、50歳代前半までは1割にも満たないが、50歳代前半に1割、60歳代後半には4割強となる。また、「夫婦のみ」世帯も、50歳代前半では1割強に過ぎないが、以後増えて60歳代では4割を占める。なお、「夫婦＋未婚子」の世帯は、50歳代までは3～4割前後あるが、60歳代になると1割代へと減少する。中年期でも、50歳代の半ばを境とし

て、若い年齢層では親との同居か未婚子との核家族世帯、年上の年齢層では夫婦のみか子との同居世帯となる、という特徴をもつ。

つぎに、中年期女性の社会参加の状況をみると、まず、有業率（「収入のある仕事をしている」）は、40歳代は9割弱であるが、50歳代前半で7割弱、50歳代後半で5割、60歳代前半3割強、60歳代後半2割弱と、加齢とともに減少する。

なお、配偶者（夫）の有業率は、40歳代では10割であるが、50歳以降に減少し、50歳代前半から9割、8割弱、6割、4割となる。夫の方が妻よりもつねに有業率は高い。

表1 調査対象者の属性一覧

(実数) %

	40～44歳 ( 66)	45～49歳 (104)	50～54歳 (148)	55～59歳 (168)	60～64歳 (159)	65～69歳 ( 69)
平均年齢 (歳)	42.1	47.0	52.2	57.2	61.7	66.3
結婚経過年数 (年)	18.3	22.8	27.6	33.2	36.9	43.8
同居世帯員数 (人)	5.3	4.4	4.0	3.6	3.7	4.0
世帯構成 <sup>1)</sup>						
①夫婦のみ	1.5	9.6	14.2	32.7	42.8	40.6
②夫婦＋未婚子	30.3	36.5	37.8	28.0	15.7	10.1
③夫婦＋既婚子 <sup>2)</sup>	—	2.9	4.7	11.9	28.9	44.9
④親＋夫婦	3.0	5.8	12.2	10.1	5.0	1.4
⑤親＋夫婦＋子 <sup>3)</sup>	65.2	45.2	30.4	16.7	6.9	—
⑥その他	—	—	0.7	0.6	0.6	2.9
社会活動日数 (月平均)	4.7	4.5	5.9	7.9	10.1	10.8
有業率 (%)	87.9	87.5	67.8	48.5	34.8	17.6
配偶者の有業率 (%)	100.0	99.0	92.6	77.2	61.5	42.0

1)  $P \leq 0.001$  2) 「孫あり」を含む。 3) 「未婚子」「既婚子」「既婚子＋孫」を含む。

社会活動（収入を伴わない、地域・ボランティア活動、趣味・学習活動など）への参加状況は、その活動のための月平均外出日数からみた。結果は、加齢とともに活動日数が増え、40歳代前半の4.7日から50歳代後半の7.9日、60歳代後半には10.8日にもなる。分析対象の女性は、収入のある仕事をしなくなったら社会活動へと、社会参加の場を移しているということになる。

本対象者は、地域婦人会を通して実施したために会員が89%を占める。したがって、対象者の属性には、婦人会会員であるということからくる経済的・社会的なベースで偏りがあると思われる。しかし、一般的な中年期女性の近い将来の姿であると取り押さえることも可能であり、本研究の分析対象として適切であると考ええる。

## (2) 伴侶性形成の概要

夫婦の伴侶性形成の実態を4つの調査項目から明らかにする。結果は、年齢階層による有意な違いはなく、40～69歳層を中年期と定義したことに一つの根拠を得ることになった（以下、表2・3参照）。

まず、情緒面での一致を知るための、「配偶者（夫）は、あなた（妻）の趣味や社会活動を理解してくれる」か否かの設問に、中年期の女性は、「理解がある」とするのが半数の49%で、「ふつう」が44%、「理解がない」は6%である。

つぎに、同じく情緒面に関する設問で、「配偶者（夫）は、あなた（妻）の人生観・価値観を理解してくれますか」に対しては、「理解がある」とするのは39%、「普通」53%、「理解がない」7%であ

表2 年齢階級別調査結果一覧

(実数) %

	40～44歳 ( 66)	45～49歳 (104)	50～54歳 (148)	55～59歳 (168)	60～64歳 (159)	65～69歳 ( 69)
妻の社会活動日数* * *						
①0～3日	47.0	48.1	33.8	22.6	13.8	18.8
②4～9日	33.3	28.8	31.8	32.7	23.3	17.4
③10日以上	10.6	10.6	18.2	31.0	47.8	46.4
夫の家事参加の程度						
①よくする	4.5	2.9	4.1	3.6	7.5	4.3
②時々手伝う	43.9	45.2	37.8	37.5	42.1	44.9
③全くしない	51.5	51.0	54.1	57.7	49.1	46.3
夫の妻の趣味・社会活動への理解						
①理解がある	45.5	46.2	48.0	50.0	54.1	49.3
②ふつう	45.5	47.1	45.3	42.3	42.1	43.5
③理解がない	9.1	6.7	5.4	6.5	2.5	5.8
夫の妻の人生観・価値観への理解						
①理解がある	36.4	35.6	34.5	36.3	45.3	43.5
②ふつう	53.0	51.9	55.4	58.3	48.4	46.4
③理解がない	10.6	12.5	8.8	4.2	4.4	8.7
夫婦一緒の外出（実態）						
①よく一緒に行く	30.3	18.3	25.7	25.0	26.4	30.4
②時々一緒に行く	48.5	56.7	45.3	48.8	50.9	43.5
③めったに一緒に行かない	21.2	24.0	27.0	25.0	21.4	24.6
夫婦一緒の外出希望						
①そうしたいと思う	57.6	41.3	44.6	41.1	51.6	47.8
②たまにはそうしたい	30.3	47.1	36.5	43.5	33.3	27.5
③あまり思わない	12.1	11.5	15.5	13.1	11.9	20.3

(1) \* \* \*  $P \leq 0.001$  (2) 無答・不明は表記していない。

表3 各属性と項目間の関連の有意差判定一覧

	①年齢 階級	②世帯 構成	③妻の 就業	④夫の 就業	⑤社会 活動	⑥夫の 家事	⑦夫の 理解	⑧夫の 理解	⑨夫婦 外出	⑩外出 希望
①年齢階級	—	***	***	***	***	—	—	—	—	—
②世帯構成		—	***	***	***	—	—	—	—	*
③妻の就業の有無			—	***	***	—	—	—	—	*
④夫の就業の有無				—	***	—	—	—	—	—
⑤妻の社会活動日数					—	*	***	***	***	*
⑥夫の家事参加程度						—	***	***	***	***
⑦夫の理解(妻の趣味・社会活動)							—	***	***	***
⑧夫の理解(妻の人生観・価値観)								—	***	***
⑨夫婦一緒にの外出実態									—	***
⑩夫婦一緒にの外出希望										—

\*  $P \leq 0.05$       \*\*\*  $P \leq 0.001$

る。

情緒面の一致について、今回は「理解」という表現をとったが、その内容を「趣味・社会活動」と「人生観・価値観」とに分けると、理解の程度に差が出ることがわかる。そして、夫婦の関係性としてより深いと考えられる人生観への理解が、趣味・社会活動への理解よりも程度が悪くなる。そこで、この趣味・社会活動と人生観・価値観への理解の関連をみると、両者の程度が一致する割合は74%である。したがって、夫が妻の趣味・社会活動へは「理解がある」が、妻の人生観・価値観には「ふつう」であるというズレが15%となる。

では、行動面の伴侶性の実態を、「あなたは、自由な時間に配偶者（夫）と一緒に、旅行や鑑賞、買物などに行きますか」という設問で捉えた。「よく一緒に行く」のは全体の4分の1の26%、「時々一緒に行く」が半数の49%、「めったに一緒に行かない」が4分の1の24%となる。

夫婦一緒にの外出の実態は前述の通りであるが、中年期の女性は「夫と一緒に外出したり、鑑賞や買物をして共に楽しみたい」と考えているだろうか。結果は、「そうしたいと思う」が半数近くの46%を占め、実態を上回る数である。「たまにはそうしたい」が38%、そして「あま思わない」は実態を下回る14%である。

夫婦一緒にの外出実態と希望の関係をみると、両者が一致するのは56%である。ズレは、外出希望

は「そうしたいと思う」が「時々」か「めったに」しか外出しないが24%、「たまにはそうしたいと思う」が「めったに一緒に外出しない」が11%、というように、中年期の女性は夫婦一緒に共通の趣味や活動を楽しみたいと考えているが、現実にはその希望・期待は必ずしも充たされてはいない傾向がみられる(図2参照)。したがって、行動面における伴侶性の形成のためには何が必要か、その促進要因を探ることには意義があると思う。

### (3) 伴侶性形成の促進要因

夫婦の伴侶性形成の促進要因となると仮定した、社会活動のための外出日数と夫の家事参加の程度について、各々の属性との関連、及び両者の関連を分析する(以下、表2・3参照)。

まず、この外出日数と家族構成との関連をみると、「夫婦のみ」の世帯では外出日数は9.6日と多くなるが、「親」との同居世帯(「親+夫婦」6.1日、「親+夫婦+子」5.6日)では外出日数が少なくなることが明らかである。「子」との同居は、子が既婚子(9.4日)の方が未婚子(7.1日)の場合よりも外出日数が多くなる。女性(「親」同居の8割が、夫の親である)の場合は、「親」との同居により、その生活行動がある程度拘束されることが分かる。したがって、間接的に、老親との同居は夫婦関係に負の影響を与えるといえる。

配偶者(夫)の家事参加の程度は、年齢階層による有意な差はなく、合計でみると、家事を「よ

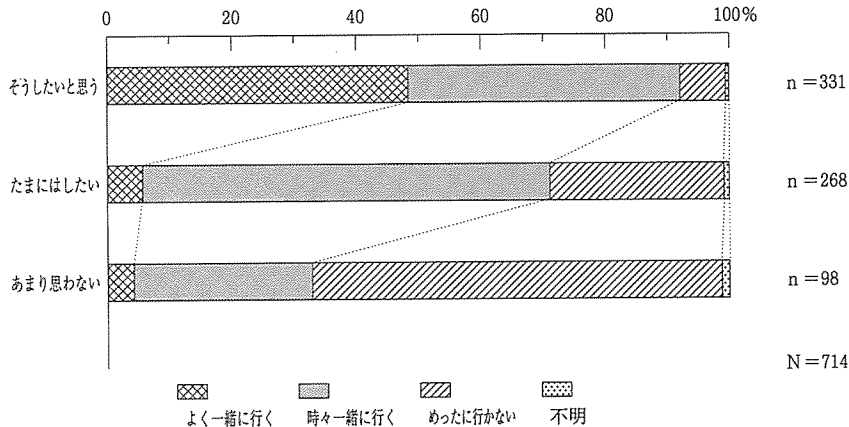


図2 夫婦一緒に外出希望と夫婦一緒に外出

くする」夫は5%程度で、「時々手伝う」が41%、「全くしない」が52%と半数を占めている。なお、夫が就業しているか否かは、家事参加の程度に何ら影響を与えていない。

つぎに、夫の家事参加の程度を世帯構成別にみると、有意な差ではないが、「夫婦のみ」の世帯では「時々」という程度であるが「手伝う」夫が半数を占める。「子」や「親」との同居は、「全くしない」に傾く。

では、妻の社会活動日数と夫の家事参加の関係をみると、妻の活動日数の多い方が、夫が家事を「手伝う」傾向が認められる。妻の外出日数については、年齢をはじめ、世帯構成そして妻の就業の有無などの自らの属性による変化がみられるが、夫の家事参加については、夫の属性による有意な違いがみられるものはない。それだけに、夫の家事参加が困難な背景が伺える。この背景には時間的・技術的な問題というよりも、強固な性別役割分業観があると考えられる。

#### (4) 伴侶性形成項目と属性

まず、妻の趣味・社会活動と妻の人生観・価値観への夫の理解について、各々属性別にみる（以下、表2・3参照）。

妻の趣味・社会活動と世帯構成の関連をみると、「夫婦のみ」世帯が「理解がある」割合が59%と最も高い。「親」との同居世帯で「理解がある」のは45%で、「子」との同居では47%である。統計的に

は有意な差ではないが、「夫婦のみ」世帯で、夫の理解があることは注目される。なお、妻の就業の有無別による違いはない。

では、妻の人生観・価値観についてはどうか。やはり「夫婦のみ」世帯が「理解がある」が46%と多く、「親」との同居では33%と少なく、「子」との同居では38%とやや多くなる。趣味・社会活動よりも「理解」の程度は低いものの、「夫婦のみ」世帯が良好であることには変わりない。なお、「夫婦のみ」世帯は50歳代後半からの年齢層に多いのである。

つぎに、行動面の伴侶性形成実態である夫婦一緒に外出の程度は、世帯構成による有意な差はないが、「夫婦のみ」世帯では「よく行く」のは31%と、「子」との同居では21%であるの比べてやや高率である。なお「親」との同居も、27%と「夫婦のみ」世帯と同じ位の割合である。つまり、現時点における中年期の夫婦の伴侶性は、情緒面の理解も行動面での実態も、諸属性による違いが小さく、それだけに硬直したものと推測される。

では、夫婦一緒に外出したいという希望についてはどうか。外出の希望には、世帯構成別と妻の就業の有無により有意な差がみられる。世帯構成別の外出希望は、「思う」が、「夫婦のみ」世帯で53%、「子」との同居世帯が43%、「親」同居の二世帯世帯では37%、三世帯世帯では47%となっている。逆に「あまり思わない」のは、「夫婦のみ」

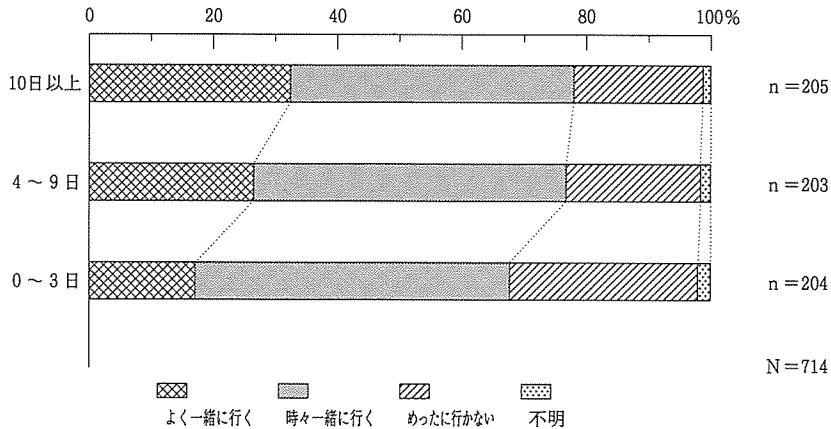


図3 妻の社会活動日数と夫婦一緒の外出

世帯では12%であるが、「子」との同居では既婚子との同居世帯では22%にもなり、未婚子でも16%である。やはり、子どもとの同居の場合は、夫婦関係より親子関係へ関心が向かい、一方親との同居は、夫婦関係重視への関心を阻害するという図式も薄く透けて見える。

つぎに、妻の就業の有無別にみると、有業の場合に夫婦一緒に外出したいと「思う」のは43%であるが、無業では51%と多い。しかし、「あまり思わない」のは、妻の就業の有（13%）無（14%）による差はない。したがって、妻の就業は、夫婦一緒に外出の希望の程度を低下させるものの、決定的な低下要因とはいえないと考える。

以上のように、伴侶性形成項目については、夫婦一緒に外出希望を除くと、中年期の夫婦という括りで言い切れる。

##### (5) 伴侶性促進要因と伴侶性形成

伴侶性形成促進要因の①妻の社会活動参加日数、②夫の家事参加の程度と伴侶性形成の項目との関連を分析した。その結果、各々有意な関連がみられた。

まず、妻の活動日数の多い方が、夫の妻の趣味・社会活動への理解は深まる。活動日数が「4日未満」では、「理解がある」のは41%であるが、4日以上では58%と高まる。

夫の妻の人生観・価値観への理解との関連は、前項と同様に活動日数が「4日未満」では、「理解

がある」のが30%、「4～9日間」43%、「10日以上」49%と、妻の活動日数が増すと夫の理解が深まる。

つぎに、夫婦一緒に外出も、「よく行く」のは、「4日未満」で17%、「4～9日間」27%、「10日以上」33%と、妻の活動日数が増すと夫婦一緒に外出程度も高まる(図3参照)。つまり、妻が社会活動に熱心であること、より家庭外に積極的な関心を寄せることは、夫婦一緒に行動半径・機会を増やすことに通じるといえる。

さらに、夫婦一緒に外出希望は、妻の活動日数が「4日未満」で「思う」が39%であるが、「4～9日」50%、「10日以上」54%と、活動日数が増すと外出希望も強くなる。前項の実態と同様に、妻の社会活動日数が外出希望に及ぼす影響は大きい。

では、夫の家事参加の程度別に、夫の妻の趣味・社会活動への理解をみると、夫が家事を時々でも「手伝う」場合は、「理解がある」のは59%であるが、「全くしない」では40%と急減する。

また、夫の妻の人生観・価値観への理解についても、夫が家事を「時々手伝う」場合、「理解がある」のは45%であるが、「全くしない」場合は31%と少なくなる。夫が家事を全くしないということは、妻の行動や考え方などへの関心も薄いといえる。

夫婦一緒に外出実態については、「よく一緒に行く」のは、夫が家事を「時々手伝う」では28%で

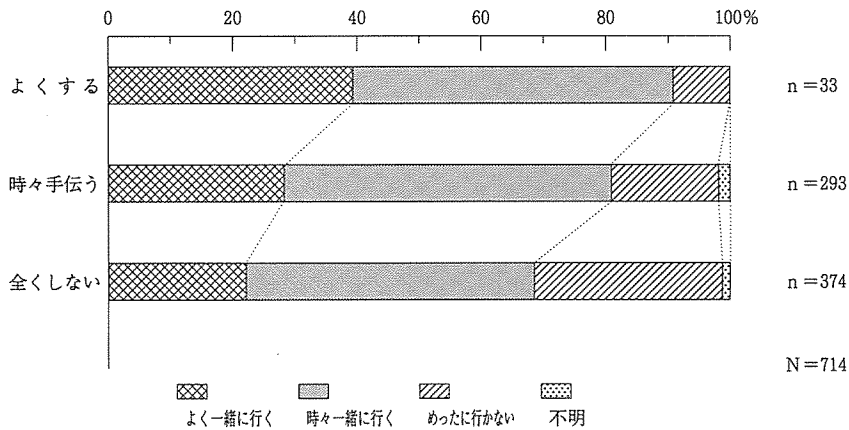


図4 夫の家事参加と夫婦一緒の外出

あるが、「全くしない」では22%と減る。「めったに一緒に行かない」は、夫が「手伝う」場合には18%であるが、「全くしない」では31%にもなる（図4参照）。夫が家事を「手伝う」ことは、妻の生活行動への理解を深めることにつながり、さらに、妻との共同行動（夫婦一緒の外出）の機会を増やす方向に働くことが確認できた。

夫婦一緒の外出希望との関連も、夫婦一緒に外出したいと思うのは、夫が家事を「時々手伝う」では53%を占めるが、「全くしない」では39%となる。外出希望についても、外出実態と同様に夫の家事参加の程度が与える影響は大きい。

以上のように、①妻の社会活動日数と②夫の家事参加の程度は、夫婦の伴侶性形成に重要な役割

を果たしていると結論付けることができる。なかでも、夫の行動面での理解（家事参加）が夫婦一緒の外出実態に与える影響を強調したい。

#### (6) 伴侶性形成項目間の関連

伴侶性形成項目間の関連のなかでも、情緒面と行動面との関連を明らかにする。

まず、夫の妻の趣味・社会活動への理解と夫婦一緒の外出の関係をみると、夫に「理解がある」と夫婦が「よく一緒に行く」のが35%になるが、「ふつう」では17%へと半減する。そして、「めったに一緒に行かない」のは、夫に「理解がある」場合は15%であるが、「ふつう」では31%になる。サンプルはやや少ないが、夫に「理解がない」場合は、「よく一緒に行く」のは10%過ぎず、「めっ

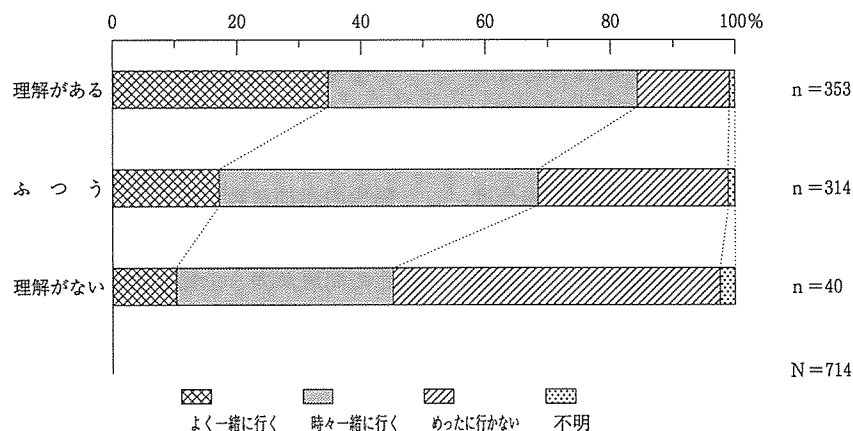


図5 夫の妻の趣味・社会活動への理解と夫婦一緒の外出

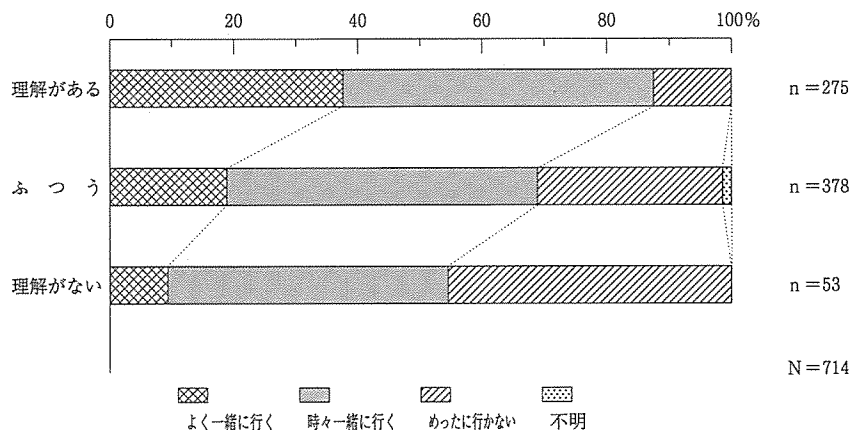


図6 夫の妻の人生観・価値観への理解と夫婦一緒の外出

たに行かない」は53%にも上る（図5参照）。

夫の妻の人生観・価値観への理解と夫婦一緒の外出の関係も、夫に「理解がある」と夫婦一緒の外出に「よく行く」のが38%で、「ふつう」では19%と半減する。一方、夫の「理解がない」場合は、「よく行く」は9%、「めったに行かない」は45%である（図6参照）。

この情緒面の行動面における伴侶性形成に及ぼす影響は強いことは明瞭である。そして、趣味・社会活動への理解と人生観・価値観への理解の両者が、夫婦一緒の外出に及ぼす影響力が非常に似通っているということは、夫の両者の理解が行動面での伴侶性形成に必要であることを示唆している。

つぎに、夫婦一緒の外出希望との関係を見ると、夫の妻の趣味・社会活動へ「理解がある」場合は、一緒に外出したいと「思う」のが61%で、「あまり思わない」は6%である。しかし、夫の理解が「ふつう」であると、「思う」のは33%、「あまり思わない」は19%となる。夫の「理解がない」場合は、さらに妻の夫との外出希望は低下する。

また、夫の妻の人生観・価値観への理解は、「理解がある」場合は、夫婦一緒の外出したいと「思う」のは67%も占め、「あまり思わない」は6%である。そして、夫の理解が「ふつう」になると、「思う」のは36%、「あまり思わない」は15%となる。

このように、夫の妻の趣味・社会活動、人生観・価値観への理解の深まりは、夫婦一緒の外出希望を高めるのに強い影響をもつことが分かる。また、夫の妻に対する理解は、夫婦一緒の外出実態よりも希望レベルへの影響が大きいことも明瞭である。つまり、一緒に外出したいと思っても、その思いが実現するには、本稿の仮説である妻の社会活動参加や夫の家事参加などの具体的な行動要因の介在が必要であると考えられる。

### 3. 要約と結語

以上、中年期の女性を対象として、その夫婦の伴侶性形成に関して調査・研究を行なった。本稿では、①女性の社会活動参加と②夫の家事参加が夫婦の伴侶性形成にとって促進要因となるとの作業仮説を立ててデータ分析をすすめた。

まず、中年期（40歳から69歳層）女性の属性の特徴をあげると、中年期のなかでも比較的若い年齢階層では有業率が高く、加齢にともない社会活動への参加日数が多くなる。また、中年期は世帯構成に多様性がみられ、比較的若い層では親世代との同居が多く、加齢により自らが親世代となり子世代との同居が多くなるが、同時に夫婦だけの世帯構成も増える。

データ分析の結果は、伴侶性形成を示す4つの項目（夫の妻の趣味・社会活動への理解、夫の妻の人生観・価値観への理解、夫婦一緒の外出実態、



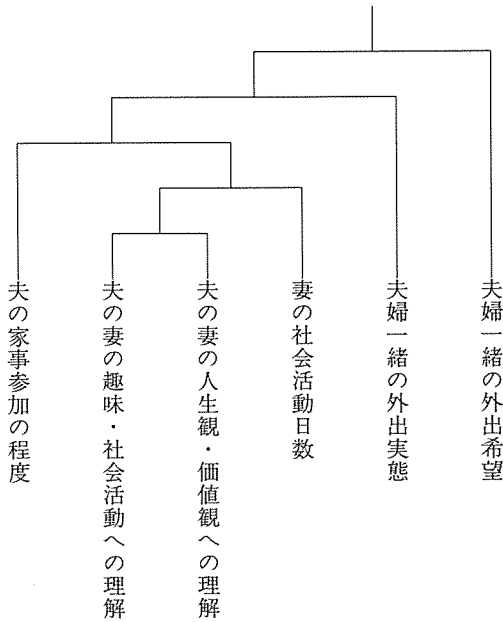


図7 調査項目間の関連図

夫婦一緒の外出希望は、年齢階層別、世帯構成別による有意な違いはみられず、また夫の家事参加の程度についても同様であった。そこで、妻の社会活動日数については、年齢階層別及び世帯構成別に有意な違いがみられたが、夫婦の伴侶性形成に関しては、「中年期」という括りが想定できるということになる（他の年齢階層との比較を重ねて検証する必要がある）。

つぎに、妻の社会活動日数と夫の家事参加の伴侶性形成促進要因は、夫婦の伴侶性形成を示す4つの項目と有意な関連がみられた。したがって、作業仮説は立証され、(1)妻の社会活動への参加は、夫婦の伴侶性形成にプラスの作用をする、(2)夫の家事参加は、夫婦の伴侶性形成にプラスの作用をする、という結論を得たといえる。また、伴侶性形成の4つの項目間にも強い関連がみられ、伴侶性形成が情緒面と行動面の両面から成り立つことが確認できた。

そこで、前記の6項目についてクラスター分析にかけると、図7に示すようになる。夫の妻への理解の2項目間が最も強い関連があり、つぎに、妻の社会活動日数と夫の家事参加の関連が強い。

それから夫婦一緒の外出実態との関連が出てきて、夫婦一緒の外出希望は最も離れたところにある。つまり、夫婦間の情緒面における理解・一致を前提として、つぎに、妻の積極的な社会への関わりと夫の家事遂行への関心・参加という行動があって、それから夫婦一緒の外出という行動面の伴侶性が形成される、という構図がみえたと考える。

したがって、今後、中年期における夫婦の伴侶性を形成していくには、まずは、情緒面における理解と一致を得て、つぎには、具体的な行動として、妻は積極的に社会参加（就業、社会活動）を図り、夫は家庭内へ目を向け、家事を担うという姿勢が求められ、ここで、夫婦の共通した趣味や関心事が生まれ、共に行動できるということになる、ということである。当然ながら、妻が社会参加を図り、夫が家事に参加するには、前述したように、固定的な性別役割分業観の払拭という課題も指摘しておかなければならない。

なお、本稿においても、夫婦の行動面における具体的な伴侶性のスタイル（夫婦一緒に観劇に出掛けるのか、共通の趣味の学習教室に通うのか、バックツアーに夫婦揃って参加するのか、それとも静かに夫婦で散歩するのか、つまり、何が良いのか）をモデル化するところまでには至っていない。そこで、夫婦の伴侶性形成に向けた有意な提言をするために、さらに調査・分析・考察を続けることにしている。

付記 本研究は、平成6・7年度の文部省科学研究費助成を得ている。

アンケート調査は、佐賀県地域婦人連合会の皆様のご協力を得て実施できた。心より感謝致します。

## 注

- 1) 赤星礼子「中年期における夫婦の伴侶性形成に関する研究（第1報）」『佐賀大学教育学部研論文集 第43集 第2号』1996, pp73～81.
- 2) 赤星礼子「多様な高齢期の生活形態に向けての意識変革」『高齢者生活文化の創造—人生100を生

きる一』九州家政学総合研究会編，九州大学出版  
会，1995，pp89～106.